

僕は風になるだろう

僕は墓参が苦手だ。こんな重い石の下のジメジメした空間に閉じ込めてごめんね、といつも許しを乞うて拜んでいる。

自分の死後は灰にしてもいい、誰かに樹上からラップでも歌いながら陽気に撒いてほしいが、待てよ、これって大気汚染になるではないか。僕の灰を微量でも頭に浴びたとたん、髪の毛がちまちまレインボーカラーに変貌したら迷惑至極だろう。

やはり、風、風、風だ。坂口安吾の「風博士」に出会ったのは二十代の後半だった。出張の多い保険の調査員をしていた時期で、このとき、北陸三県の出張を終えて東京へ向かう夜行列車に乗っていた。

当時は東海道新幹線が開通して間もない頃で、在来の各本線では夜行列車が多く走っていた。多分、僕が乗ったのは旧型車両の鈍行だったろう。旅費を浮かす

ためだった。早朝に上野に着くので眠くなるまで読書しようと思ふと福井駅で買った坂口安吾の文庫本を広げた。短編集で目次を広げて「風博士」というタイトルに興味がいって、そのペー

字の感嘆詞をやたら使って気負った作品という印象だった。風博士がライバルの蛸博士を憎むあまり自殺するというストーリーもピンとこなかった。

陣の風が吹き抜け顔を上げ

でも、風博士が自邸階段

で風になるという結末には強い衝撃を受けた。以来、折々に七、八度は読み返した。風になるところでいつも衝撃を受けた。今、この原稿を書いていて思い知らされたことがある。思い立つ度に繰り返し読んできた訳は風になることに憧れていたからではないか。

最後の読書



志茂田景樹

＝作すがど
げき。『リンな
かまにキル
だ。1940年生書に
も著街に
家。のっ

た弾みに文庫本を取り落とした。どこかの駅に到着したときで、乗降の客が車両の前後にあるドアをともに開けた状態になったため、デッキから吹き入った風が通路を走り抜けたのだ。文庫本を拾い上げて改めて読み始めた。文語体で漢

イメージした通りにいかないかもしれないが、うらうらとした陽気の晩春の頃、死期を悟った僕は人知れず気に入った沢をゆるりと遡行し、小さな滝のそばの岩に腰を下ろす。滝の落ちる音と小鳥のさえずりを聞きながら、いよいよよくなるかと思つたら「風博士」を読む。風博士が風に変じたときに息絶えれば、僕は風になるだろう。そよとした一瞬の風に。